

□

自分自身を知ろうとする時、人間は鏡の前に立ちます。全体としておかしくないか、見ようとする時は、そうとうに離れた所に立ってみないと、全体は見ることができない。自分の生きている社会を見る時も同じです。いったんは離れた世界に立ってみる。外に出てみる。遠くに出てみる。そのことによって、ぼくたちは空気のように自明（「あたりまえ」）だと思ってきたさまざまなことが、「あたりまえではないもの」として見えてくる。演劇の好きな人は、「異化効果」というブレヒトの言葉を思い出すでしょう。社会学のキーワードで言うと、〈自明性の畏からの解放〉ということなのです。

インドやメキシコやブラジルに行った日本人は、その国が大嫌いになるか、大好きになるか、どちらかが多い。ぼく自身は大好きになったほうですが、嫌いになった人の気持ちはよく分かる。嫌いになること理由はよく分かる。しかし、どうして自分が好きになったかということは、よく分からない。日本に帰って、「どうだった？」ときかれて、話すことはほとんど、困ったことや不便なこと、ひどいこととか危なかったことです。

後になって振り返ってみると、「途方に暮れる」というところから、ぼくたちのインドの旅は始まっていた。もしも、この「途方に暮れる」ということがなくてスケジュール通りに運んでいたら、ヨーロッパやアメリカの旅行と同じ、これも一つの旅行にすぎなかったと思う。旅と旅行は違うのです。

けれども、それは後になってから思うことで、その時は本当に途方に暮れる。

それで嫌いになったのだからうときかかれると、不思議な魅力で、好きになっている。これは矛盾です。

□

異国でいちばんおもしろいのは、バザール、メルカードなどと呼ばれる市場ですが、そこでは人々がちよつとした値段とか品

物のことで、朝から夕方まで飽きることなく交渉し、機知を競い熱弁をふるっています。売る人と買う人の間で交わされる会話の長さは、賭けられている金額の僅かさからみると割に合わないくらいのもので、しかも最後には、相手が気に入ったり入らなかったりするみたいなこと、長時間にわたった交渉の成果を惜しげもなく放棄しておまけしてくれたりします。彼らの意識では、たぶん損得にこだわっているつもりらしいが、無意識にはそういう交渉自体を楽しんでいるように見えます。バザールだけでなく、例えばバスを待つみたいな時間でも、田舎だったら「午前」に一本、「午後」に一本来るというバスを日だまりで待っているうちに、他愛のない話題で、すぐにみんなで盛り上がってしまう。バスを待つ時間は無駄だという感覚はなくて、待つ時には待つという時間を楽しんでしまう。時間を「使う」とか「費やす」とか「無駄にする」とか、お金と同じ動詞を使って考えるという習慣は「近代」の精神で（"Time is money."）、彼らにとって時間は基本的に「生きる」ものです。そういえば、ぼくたちでさえ、旅で不思議に印象に残る時間は、都市の広場に面したカフェテラスで何もしないで行き交う人々を眺めて過ごした朝だとか、海岸線を日が暮れるまでただ歩き続けた一日とか、要するに、何かに有効に「使われた」時間ではなく、ただ「生きられた」時間です。

遠くから自分の社会を見る、という経験のいちばん直接的な私たちは、異国で日本のニュースを見る、という機会です。ある朝、小さい雑貨店の前の石段に腰を下ろして、「午前」のバスを待っていると、新聞売りの男の子が来て、「日本のことが出てくるよ!」と言う。日本の東京近郊の駅で、電車が一時間くらい遅れたために乗客が騒ぎを起こして、駅長室の窓がたたき割られた、という報道だった。世界の中には**いぶん異常な国々**がある、という感じの扱いだ。ぼくはその中にいた人間だから、朝の通勤時間の五分十分の電車の遅れが、ビジネスマンにとってどんなに大変なことかよく分かる。分刻みに追われる時間に生活がかけてられているという、ぼくにとってはあたりまえであった世界が、「遠くの狂気」のように不思議な奇怪なものとして、今ここでは語られている。

近代社会の基本的構造は、ビジネスです。business とは busyness 「忙しむ」ということです。1 「忙しさ」の無限連鎖

のシステムとしての「近代」のうわさ。遠い鏡に映された狂気。ぼくはその中に帰っていくのだ。

ヨーロッパの都市の中心には時計がある。都市の中心の広場には、教会があり市役所があり、そして必ず大時計がある。ヨーロッパの人たちはいつの頃からか、時計を見上げながら「近代」を育んできた。

いつの頃からか？ 十四世紀の前半、ミラノ、ボローニヤ、フィレンツェのようなイタリアの諸都市で、初めて「公共用時計」が設置された。十四世紀の後半から十五世紀にかけて、ドイツ、オランダ、スイス、フランス、ベルギー、イギリスの都市に、ほぼこの順番で大時計が設置される。人々が毎日の生活の中で、時間を計りながら生きる、という時代が始まった。時間、という枠組みの中に、人間たちの生がおかれた。

それでもこの時代の時計は、一本針だった。「分針」というものはなかった。「分」という単位は、まだ生活に必要ななかった。ぼくたちには、もう時計といえは、二本針があたりまえです。というか、三本針もふつうです。

三

メキシコのインディオにとつてとても大切な祭りの一つに、「死者の日」というのがあります。十一月一日から二日にかけて死者たちが帰ってくる日で、村の墓場で死者たちといっしょに歌ったり踊ったりして、夜と昼を楽しく過ごします。何日も前から、この日のためにごちそうを作ったりして準備をします。いっしょに過ごす死者の範囲は、「自分の死者たち」で、血縁関係の近さとは必ずしも同じではなく、懐かしいと思う死者たちだということ。もう一つおもしろいのは、ごちそうを「自分の死者たち」の数よりも一人分多く、余分に作っておくのだそうです。どの生者にも呼び出されない孤独な死者たちもいるので、そういう死者たちがうろろしている、どこかの家族に呼び出されている死者の一人が、「俺といっしょに来いよ。」と誘うのです。そういうプラスワンの死者が来た時に、ごちそうの数に余裕がないと寂しい思いをさせるので、必ず余分に作っておくのです。これはもちろんメキシコの生者の社会の投影です。メキシコでは友人を二人誘うと、その友達とかフィアンセと

かを引き連れて、右四人で来たりする。こうして友情が広がってゆく。この社会が「よそ者」にとっても魅力的なのは、こういう感覚から来るように思います。死者の日のごちそうの「余分の一人分」ということは、社会学にとっても究極の理想でもある。「開かれた共同体」、「自由な共同体」ということとも関わる話で、たくさんのことを考えさせます。

マックス・ウェーバーは『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』という論文で、近代社会をかたちづくってきた基本的な「精神」を解き明かしているのですが、その核心にある典型例として紹介しているのが、ベンジャミン・フランクリン、アメリカの百ドル紙幣の肖像になっている人物の、「Time is money.」（「時は金なり」）という生活信条です。少し引用してみます。「一日に自分の時間の中から一グロート銀貨に相当するだけの時間（それは恐らく数分間にすぎないだろう）を無為に過ごす者は、一年間には六ポンドを浪費する者であり、六ポンドを失う者は、百ポンドを使う権利を失うのである。五シリングの価値のある時間を無為に浪費する者は、五シリングを海に捨てるのと同じことである。五シリングを失う者は、これを生業に用いて回転させることによって得る一切の利益を失う者である。この利益は、青年がそうとうの年配に達するまでには、巨大な金額に上ることであろう」。時間を貨幣と同じように考えて、このように「使う」精神こそが資本主義社会、つまり「近代」の社会を形成してきたことを、ウェーバーはみごとに解き明かしています。

死者たちのための食事を何日もかけて準備し、一日をその墓場で過ごし、そのうえ更に、ゆかりもない死者のために余分の一人分までも用意するということは、「Time is money.」の精神からすれば、ムダの上にムダを重ねるようなものです。インディオが、社会の近代化の中で生活を合理化しようとするれば、真っ先に削り落とされるのは、この「余分の一人分」でしょう。けれども、その時この社会からは、何かある本質的なものが削り落とされることになるだろう。人生は何かを失うことになるだろう。そぎ落とされたものは、フランクリンの貨幣換算のように、計算してみることもできないし、目にも見えないし、言葉にもほとんどならないものです。

社会の「近代化」ということの中で、人間は、実に多くのものを獲得し、また、実に多くのものを失いました。獲得したもの

は、計算できるもの、目に見えるもの、言葉によって明確に表現できるものが多い。しかし喪失したものは、計算できないもの、目に見えないもの、言葉によって表現することのできないものが多い。

「現代」から離れた幾つかの世界の中で経験することは、ネガティブな話が多い。それなのに好きになっているという矛盾の理由を、ぼくたちは今、言うことができる。これらの世界が嫌いになる理由（よくない点）は、目に見えるもの、計算できるもの、言葉にしやすいものが多い。反対に好きになる理由（魅力）は、目に見えないもの、測定できないもの、言葉では説明できないものが多い。けれども、人間が生きていくうえでいちばん核心にあるものは、目に見えないもの、数量化できないもの、言葉にはなりにくいものが多い。

ぼくたちは今、「前近代」に戻るのではなく、「近代」とどまるのでもなく、近代の後の新しい社会のかたちを構想し、実現してゆくほかはないところに立っている。積極的な言い方をすれば、人間がこれまでに形成してきたさまざまな社会のかたち、「生き方」のかたちを自在に見はるかしながら、本当によい社会のかたち、「生き方」のかたちというものを構想し、実現することのできる場所に立っている。

この時に大切なことは、異世界を理想化することではなく、「両方を見る」ということ、²方法としての異世界を知ることによって、現代社会の（自明性の檻）の外部に出てみるということ。さまざまな社会を知るということは、さまざまな生き方を知るということであり、「自分にできることはこれだけ。」と決めてしまう前に、人間の可能性を知るということ、人間のつくる社会の可能性について、想像力の翼を獲得するということです。

問十四 それぞれの例を通して、筆者はどのようなことを述べようとしたのか。その説明として間違っているものを、次のア～オの中から**すべて**選び、解答欄の記号をマークせよ。(例：ア ● ● ⑤ ㊦)

ア バザールなどでの値引き交渉——「異国」における金銭や時間に対する感覚は、西欧だけでなく、日本を含む近代（現代）社会におけるそれと類似している、ということ。

イ 異国で見た日本のニュース——近代（現代）社会の、特に時間に対する感覚が、「異国」からは理解を超えた「狂気」として見られている、ということ。

ウ ヨーロッパの都市の広場に設置された大時計——人間の生が時間の枠組みの中に置かれたということ。

エ メキシコの「死者の日」——メキシコ社会には、未知の他者をこだわりなく受け入れる、合理性を超えた社会感覚がある、ということ。

オ ベンジャミン・フランクリンの生活信条——無駄を排して時間を有効に使うとする精神が、近代（現代）社会に様々なひずみをもたらした、ということ。

